
助け合う〈関係〉を導く共感
～それぞれが生きやすい社会を目指して～
Empathy: a human nature of Relationship
～ towards a well-being society ～

中山 涼子
NAKAYAMA Ryoko

第1章 助け合いとそれを導く共感

(1) 問題意識

地域コミュニティの崩壊、個人主義や資本主義などへの傾倒は、人びとの関係を希薄化し、その状態が正しいと認識させている。筆者は、この問題に対し助け合う関係を築くことが人々の生きやすさに繋がると考える。筆者の考える助け合いとは、人と人との関係の延長線上にある地点であり、それはその関係から生起する個々の形を持つべきである。当然、助け合う関係の中に、助けないという選択肢も存在してよい。そのため、筆者は道徳とは何かを明らかにするのではなく、人間が本質的に助け合う原因を模索している。他者との関係の中で自己を築き、お互いの自己を通して独特の助け合いが行われる方法として、自然発生する感情に導かれる共感に注目し、現代の共感研究の基礎となっているアダム・スミスの共感論を軸に研究を始める。しかし、スミスの研究の中でスミスの共感とは異なる共感が発見される。そこで、日本思想を根底におく本居宣長のものあはれ論の考察へと進んだ。

そこから育まれる自己の形、関係、助け合いを視野に、生きやすい社会への提言を行う。

(2) 共感の定義

近年の共感研究より、共感の定義は大きく二つに分類可能である。一つ目が、「他者の考え、視点、感じ方を認識、理解する認知能力」であり、二つ目が「他者の感情に一致するが、必ずしも同一でない感情の代理的経験、あるいは共有」である⁽¹⁾。前者は認知的側面を強調し、後者は自然発生的・認知的の両側面を含んでいる。筆者は、後者の視点を支持するため、本研究では共感を「他者よりはじまり、感情と理性、両面の過程を得て、その他者と同じような感情を体験すること」と定義する。

第2章 「与えあう共感」～同一への視点～

(1) スミスが見た世界

アダム・スミスの『道徳感情論』⁽²⁾に沿ってスミスの「共感」を明らかにする。他者と関わることで生じる共感を人間の本性として捉えたスミスの共感論は、合理化や効率化、利己的個人の尊重という現代の風潮と向き合うための重要な視点である。スミスは、人間がどれだけ利己的であろうと、必ず他者に対する関心、共感を持っていると、人間の利己、利他の両面と向き合い、それが他者との関係と相互に作用し、構築されていくと考えた。

一八世紀イギリスでは、従来からの土地と結び付いた農業や小規模な生産を生計の基礎とする保守的なジェントリとは異なる、新たな商業資本や銀行資本と結び、貨幣と信用の流通を利益の基礎とする進歩的なジェントリや商人が誕生する。この、共同体意識から商業への移行は、愛国心から利己心へ、確かなものに根差した世界から浮遊する世界へ、価値の実態から価値のヴァーチャリティへの移行に他ならない。土地に根付いた価値から、現代社会と同様の浮遊する価値へと移行する中で、スミスがどのような観点から人と人の関係を見、何が必要と考えたのかを知る事は、現代日本に生きる私たちにとって有用である。スミスは道徳感情もしくは社会的秩序をもたらすものとして共感を発見するが、共感を道徳や秩序の道具とは考えない。主体としての個人を否定し、他者と交流する中に共感を発見することは、普遍的な道徳や秩序を否定しており、普遍性のない現代に最適な視点であると考えられる。

(2) スミスの理論

- ①人は他者に関心を持ち、他者の感情を想像することで、是認・否認を行う。
- ②是認は幸福感を、否認は不快感をもたらす。
- ③他者からの是認・否認の存在を自覚し、他者の評価を知り自分の意見を合わせたくなる。
- ④胸中に公平な観察者（完全な情報を持ち、利害関係を持たない）を構築する、彼の視点に合わせて行動する、従わないと不安になる。
- ⑤成熟した観察者は自分の想像を必要とせず、観察者が想像を行い、冷静な判断・客観的な視点が持てるようになる。
- ⑥称賛に値することを望み、非難されることを避ける。
- ⑦世間の評価は不規則で、「弱い人」は評判を、「賢人」は胸中の観察者を重視する。
- ⑧一般的諸規則（正義と慈恵）が成立し、それに従うことで自己が抑制される。

スミスの共感は、自然発生すると同時に認知的である。異なる人々がお互いの同一へと向かう。ただし、完全な秩序の構築は目指しておらず、あくまで関係の中から導かれる合意地点をよしとする。自己は主体性を持っていないが、他者との関係の中で構築され、発展的、可変的である。しかし世間や評判から影響されやすく、されるべきなので、移ろいやすく、安定していない。これを安定させるためには、「自己」を築く必要がある。それは理性を重視したもので、自己を抑制する。また、是認・否認を

表現することが重要になるため、自己の在り方は外へと表出される形をとる。更に、他者とは人間に限定されている。

(3) 事例研究

事例研究では、就労支援団体に関わる被支援者、青年海外協力隊の元隊員に対して半構造化インタビューを行った。一つ目の事例では、他者との関係が希薄な状態から、お互いに助け合う関係を構築していく過程を観察した。また、現代はスミスの時代よりも多種多様な情報や機会に溢れ、多様な価値観が溢れる時代であるため、協力隊隊員の例では、仲間意識という前提があまりない状態から共感が導かれる過程を観察したいと考えた。

事例研究の結果、スミスの共感論はある程度の信憑性を得たと考えられる。

ただし、スミスの理論では、自己が外に表出され、そこからお互いを同一させる必要性が存在する。しかし、事例研究の結果、是認は表出するが否認を表出しないという偏りがみられた。そのため、以下事例研究のまとめ、スミスの共感論との異同は、本人が是認した場合のみに限ることとする。その中で、重要な点を抽出する。

まずは、共感是人々に喜びを与える。他者との共感は、他者からの承認の意味もあり、肯定的に捉えられる。他者の視点から自分を省みることで、自分を客観的に捉え、自身の変化を実感し、成長、変化が、「成長する」、「上昇する」などと形容され、自身への承認にもなり、満足度が高い。また、共感されることで、「認められている」「必要とされている」などの意識を呼び起こし、自分は他者にとって有用であり、「生きている」意味があるという安心感や実感も呼び起こしていた。

しかし、共感が喜びを生む一方で、共感できない他者や、理想像の自分に合わせられない実際の自分を知った結果、遺棄感や自己嫌悪を生むこともある。

次に、共感快不快の感情に左右されるため、快を導く「利益のある」「喜びを共有できる」他者が優先され、他者との関係は技術的・効率的な問題に還元されてしまう一面を持つ。気の合う仲間が集まる限定的なものになりがちであり、自分にとって都合のよい他者との関係を促進する、自分のための道具として共感が扱われる可能性が存在する。

自己の形成は外向きに表出される。外へ表出されることで、応答的な関係が築かれ、お互いを巻き込んだ段階的、発展的な自己の成長が見られ、同一の方向へと向かう。また、他者の立場に立つ第三者の視点を持ち、常に自分を問い返すことは、自分を省みることとなり、反省と改善を視野に、自己を発展させるとともに、自己は可変的となる。

最後に、共感当事者間から始まるため、助け合いの形は自己を中心として拡大していく段階的、発展的な形をとり、全員が共感後の助け合いに積極的であった。

以上、効用として、①「生きている」実感がわく、②自己の形成、③拡大型の助け合いを促進する、欠点として、①自身の否定、②共感の道具化、が挙げられる。スミスの共感論は、自己や関係が、現時点の自己や関係から成長していく発展型の共感である。そして欠点は、発展できない苦しみ、発展するための打算や切り捨てが内包されることである。即ち、お互いに与えあうこと（物質的、精神的）が可能であれば共感・

関係が築かれるが、可能でなければ築かれない。スミスの共感は、「与えあう共感」であり、最も重要なことは共感、もしくは共感を導くような関係を多くの人々と持つ事にある。そうすることで、より公平で客観的な自己を築くことが可能となり、助け合いの幅も広がり、多くの喜びを感じる事が可能となる。

しかし、事例研究では、他者を否認する場合に自己が外へ表出されず、内へともってしまふことが発見された。表面的には是認し、内で否認する自己を構築する。一方、同じ自己の形でも、否認を共感と捉えた人もいた。自分の是認否認を内にこめている状態で、「否定せず、全てを肯定する」ことや、「存在への共感」があると指摘した。

「自己」と「他者」の観点からスミスの共感論を考察すると、彼の論には「自己」と「他者」の存在が必要である。一方、「存在を肯定する共感」では、「自己」が消滅している。自己は内のみ存在し、外へは表出されない。伊藤は、近代文学の研究を通して日本人の自己の在り方を内に掘り下げていく自己であると指摘する⁽³⁾。このように、事例研究において発見された自己の形は、日本人特有のものであることが推察される。よって、日本の共感である、本居宣長のもののあはれ論を次に考察することとする。

第3章 「気づきの共感」～別離からの視点～

(1) なぜもののあはれか

「あはれ」は日本語での共感に相当する。特に宣長のもののあはれは、他者の感情に対して受動的で、なぜそう感じているのかを推し量り知り、感じたい・感じたくないという本人の意思とは裏腹に、感じてしまうものである⁽⁴⁾。認知的側面と自然発生的側面を有しており、ほぼスミスの共感の定義と同じであるため研究の対象とした。

また、例えば近世中期の藩主、上杉鷹山はもののあはれの道徳的、教育的側面を認め、心や情性が養われること、自然に対する感受性が強くなることに触れている⁽⁵⁾。これは、他者と共感することで、助け合いが導かれることを示唆している。

(2) もののあはれとは何か

まず、「もの」とは何か。古語辞典⁽⁶⁾によると、「もの」とは、「広く対象として知覚し、認識できるものを指し、有形の物体に限らず、抽象化された無形の事がら・概念にもいう。類語の「こと」が時間の推移とともに進行・変化する状態・性質などを表すのに対して、「もの」は時間に関係なく対象化した実態にいわれる」。また、大野によれば、『源氏物語』の中に出てくる「もの」は、五つに分類可能である。①世間のきまり、②儀式・行事、③運命・動かしがたい事実・成りゆき、④存在、⑤怨霊である。これらは、個人の力ではどうにもできない、という「不可変性」を内包している⁽⁷⁾。それは、世界が変わらないのではなく、変えられないという無力感を意味する。その一方で、変化する世界の中に変わらずに存在するもの達が、時間（過去、現在、未来）を越えて内包されている。「もの」は表面では変化し続ける世界の根底に、変化しない「もの」がある、という地盤を保有している。それは様々なものが、時間と空間に関係なく存在できることを意味する。

一方「あはれ」は、「感動から自然に発する声を起源にもつ語」⁽⁸⁾である。感嘆することは、自然本位の自己が消滅した状態であり、一元論的世界への突入を意味する。一元論とは、自然と人間が同じものであると考える日本独特の思想である。ヨーロッパでは、自然を対象的に捉える対立的二元論、更に自然に対して優位に立つ人間本位主義が主張される。一方、日本の自然は人々にとって征服できるものではなく、恩恵であると同時に脅威でもある。その中で、受容的にそのどちらをも受け入れることで、良し悪しの二項対立ではなく、良くもあり、悪くもある、という一元論的世界が展開される。自然一元論は、「自然に向かって人間の意思を手控え、自己を放棄する時、初めて、自然物ではない自然」が表れることを指す⁽⁹⁾。要するに、二元論、人間本位主義を捨て、自然の本意のままに、ありのままを受け入れる姿勢である。注意すべきは、自然一元論の中の「自然」概念は、現代の私たちが考える森や動物などがある「自然」とは異なることだ。古代の自然とは、存在と同義であり、この「存在」には、全ての存在するものが含まれ、また人為性を越えた不可知的な世界でもある。

人間は常に自分を持っており、そのため自然と一元化できない。人間が一元化するためには、自己を排し、自然=存在をありのままに受け入れる必要がある。「あはれ」は、人間本位ではなく、自然本位に「感嘆させられ」、「あはれ」とつつぶやくことで、一元化を可能にする行為である。要するに、「もの」の「あはれ」とは、様々なものが時間と空間に関係なく存在している不可知、不可変的な世界の中で、自分ではどうしようもできない無力感を抱えながら、自己を排した感情に素直に従い、一元論的世界の中で、ものに共感する事ではないかと考える。

宣長によると、ものなあはれを知ることは、自分の「情（こころ）」が事にふれて感じることにある。感じる内容は、嬉しさ、悲しさなどなんでもよく、深く心に触れれば触れるほど、ものなあはれを知ることが可能となる。この議論には、「欲」と「情」という概念が登場する。坂東は、「情の徴表は主体と対象との隔たりに」あり、欲は「対象との合一（融合）や所有を目ざし、その達成を疑わないものである」と規定する。欲を達成するために、対象との融合を目指し、しかし叶わないところに、情が存在する。要するにものなあはれは、欲による失敗や隔たりを内包し、それを経験した後に嬉しさや哀しさを知り、一元論的世界へ没入することにある。また坂東は、融合・所有に成功したとしても有限な人間である以上、それは絶対性も永遠性も持ちえず、それもまた自他の隔たりとしてあらわれ、情としての性格を持つという⁽¹⁰⁾。このように、ものなあはれは欲という融合・所有のまなざしを越えて、隔たりや別離、失敗が内包されている思想である。それは、人間が自然=存在とは本質的に隔てられているという根源への了解をも意味する。

更に、宣長がものなあはれを知るためには「わきまへしる」ことが必要であると述べる。「わきまへしる」とは、「見分ける、物事の差異をよくしる」という意味を持つ。要するに、「うれしかるべき事にあひてうれしく思」う共感の念である。これは単純であるが、自分を持つ人間にとっては単純な事ではない。なぜなら、何かが起これば「自分」が思考してしまうからだ。そこで、自己を排し自然本位に考える必要性が浮上する。例えば、「薪」を見て「薪」だと思っはいけない。「薪」は「桜」であるからだ。「暖をとりたい」という人為性を排して「薪」と対峙する時、「薪」は「桜」であり、

「薪」を「わきまへしる」ことは、「桜」は「桜」であることを知る事である。要するに、「薪」を見て「桜」は「桜」であることを知る。それが人為性を排した「薪」との対峙方法である。

隔たりや別離を知る事により、人は自身の有限性を否応なく知らされる。それは、きれいなあきらめに繋がる。善いこと悪いことの重要性よりも、そのどちらの性質も持つ自然や他者、自分を受け入れることへと繋がり、優しさや思慮分別を導く。また、他者も自分も世界も運命もありのままに受け入れるしかなくなる。そして、良いこともあれば悪いこともあると、素直に受け入れることが可能となる。

また、もののあはれは内へと進む「自己」の形成を促す。宣長の自己の在り方は、自己を持つ人間が、自然本位を受け入れ自己を排除し、己を顧み、自己の中へと沈んでいく自己である。ここには、自分を「振り返り」、そもそも自分とは何なのかを、ひたすら追い求める姿がある。そして、辿りつく先は、自然＝存在の世界であると考えられる。スミスの自己が際限なく頂を目指し続けなければいけないのに対し、宣長の自己は一定のところの一つの安定感を得る。それは、例えばわざの世界での「突き抜ける」や、「極めた」ということと同義である。その先も鍛錬は続くが、自然＝存在の中で生きている実感を、体感することが可能となる⁽¹¹⁾。

更に、「わきまへしる」の観点からは、人為的にゆがめられていないありのままのものの姿が現れる。その個々のものの中に個性を知る事は、他者の異質性を奨励し、また受け入れる姿勢を促す。それは、他者の尊重や思慮分別に繋がると考えられる。

また、「薪」が「桜」であるという事実は、事実の中に事実以上のものを見る視野の広さを育むと考える。人が感知、認知できる物事は限られている。また、人為性により偏っている。それを理解すれば、自分の考えに固執することはもはや無意味である。そうであれば、自然本位のままに受け入れ、共感する。受け入れる姿勢が育まれる。

また、もののあはれを知る事により実践世界から自然＝存在を知る事が可能となることは、人にとって僥倖である。隔たっている実践世界と自然＝存在の世界を結び、その関係が切断されることはない。人々は常に身近に自然＝存在を感じながら生きる事が可能となる。人々は、隔たり、時に融合しながら、決して自然＝存在の世界から排除されることはない。それは、自身の存在が受け入れられたことと同義であり、世界内に存在している安心感、安定感を人へ与え、自分は自然＝存在に「生かされている」と感じるようになる。

助け合いの観点からは、この自己を排除した自然本位の姿勢は、単純な意識構造を構築すると考えられる。例えば、転んだ人がいたら、自分は「ドジな人だな」と思った、ではなく、「彼は助けが必要だ」、助けようという行為の理由に繋がる。

以上、欲と情、わきまえしることで、もののあはれを知ると、自己を排してありのままを受け入れ、個々の個性に気付くこととなる。またそれは、自身を安定させ、短絡的な行為を抑え、思慮分別や優しさへと繋がると推測される。更には、困っている→助けるという単純な意識構造が出現する。そして、自分が自然＝存在の中にあることに気づく。それは、自然＝存在に「生かされている」自分に気付くこととなる。最後に、内に掘り下げる自己の形成が行われる。

(3) 事例研究

前述したように、もののははれの自己の形は内向きであり、それは日本独特のものであり、よって日本独特のわぎの体得のなかにそれを知る方法があるのではないかと筆者は考えた。そのため、事例研究ではスミスの事例研究の際にインタビューした内容に加え、太鼓奏者に対する半構造化インタビューも行った。

まず、もののははれを知ると「生かされている」実感がわく。お互いをありのままに受け入れることは、自然＝存在の中へも受け入れられた事と同じであり、自分が世界内（地域内）に存在しているという、安心感や安定感をもたらす。また、自分が自然＝存在の中にいる事は、周囲の存在全てが（例えば、歴史、他者、先祖など）今いる自分と繋がっていると同義であり、それらに「生かされている」ことに気付く。

次に、助け合いを促す。「わきまへしる」ことは、短絡的な行為を抑え、思慮分別や優しさへと繋がっていた。助けるきっかけは自然本位（他者本位）であり、困っている→助けるという単純な意識構造も発見された。また、「生かされている」と感じることで、それを返したいと感じるようになる。この助け合いの形は、自分から広がっていく、というよりは、自然本位に助け合う必要性が生じ、随時対応するというものであった。

ただし、そのため仲間以外からは騙されやすく、利用されてしまうのではという懸念が浮かんだ。

また、今回の事例研究では、伝統的なわぎと、異国での生活という、非日常的な習得方法を取りあげた。そのため、現代への適応性は判断が難しい。

最後に、内にこもる自己の形成が促される。

以上をまとめると、効用として①「生かされていること」に気付く、②自己の形成、③突発的な助け合いの形、欠点として、①利用されてしまう不安、②非日常的な特殊方法、が挙げられる。スミスの発展的な共感に対し、宣長のもののははれは、自分の姿を自然＝存在の中に気づくことが重要となる。よって、宣長のもののははれは、「気づきの共感」である。

第4章 生きやすい社会を目指して

(1) 本研究のまとめ

本研究は、助け合う関係を築くことが人々の生きやすさに繋がるのではないかと考え、それを出発点としている。しかし、共感の考察から筆者は、最も重要な点は様々な助け合いではなく、共感の過程と結果としての助け合いを含めて、その固有の関係の中で人々が感じる「生きている」「生かされている」実感なのではないかと考えるようになった。

スミスの共感論、宣長のもののははれ論は、双方ともに形は異なるが、自己を育み、関係を生成し、助け合いへと導いた。よって、どちらも有用であり、更に、双方を一個人の中に両立する必要性を感じた。

現代に蔓延する関係性の希薄化、関係を築きたくない人々⁽¹²⁾に対し、発展性の中で

得られる喜び、成長、助け合いなどが明示されるスミスの共感の魅力である。一方、スミスの共感論の欠点は、①自分が否定されるかもしれないという不安がつきまとうこと、②共感の道具化、が挙げられる。道具化、とは、一部の情報により誤ったイメージを相手に植え付けることや、自分にとって利益、喜びになる相手のみと付き合っていく、共感できない他者は切り捨てる、という意味である。これらは、仲島が示す、①近代社会における心理的孤立、(例えば互いの傷をなめあっても仕方がない、この否定的な事態は克服可能なものかどうか) ②負の感情を共有することへの否定(ベラーの「ライフスタイルの飛び地」⁽¹³⁾のように、影の部分切り捨て、気が合う人、気があう部分だけで人間関係を構築しようとする)、現代の孤独、疎外の原因となる考えである⁽¹⁴⁾。スミスの理論は発展的であり、助け合いを導きながらも、同時に、筆者が目指す助け合いの関係を妨げる、関係の希薄化を招く要因となり得る。しかし一方で、共感が重なり信頼関係が築かれた後には、共感が発展を促しながらも、否認を排除する姿勢が緩和した。要するに、信頼があれば否認を不安視せず発展的関係を維持できる。

共同体という基盤がない現在の日本では、スミスの論は近代人の孤独と疎外を促進するばかりである。それは、共同体が保有していた不可変的な、その人にとっての存在する場所(土地や仲間)が解体されたためである。そこに、宣長のものあはれ、自然=存在である不可変的な世界の中で、それらが在ってこそ存在する自分に気付き、「生かされている」と知る事は、有効な対策になるのではないかと考える。孤独と疎外に対し、自然=存在、世界と繋がっている安心感と、ありのままの素直な感情で生きることは、孤独を癒し、疎外に疑問を投げかける。人と人との関係に限らず、自然=存在と関係しあっていることは、当人に安定感を与える。スミスの論からは「自分」が「生きている」喜びを、宣長の論からは「世界」に「生かされている」喜びを導くことができる。

また、宣長のものあはれの特徴が、現代日本に適している点も挙げられる。宣長が自然=存在を、「もの」もしくは「物」の中に見ている点である。スミスの場合、共同体の基盤を土地とするため、移動が自由で近隣との付き合いがない現代日本には適さない。一方、宣長の「もの」を見る姿勢は、例えば「携帯(電話機能)」から「他者」を、身近な「物」から「もの」を知る事が可能である。

以上、スミスの共感論と宣長のものあはれ論は、最大限に活かされるべきであり、一個人に同座するべきであると筆者は考える。

(2) 今後へ向けての提言 ～互恵と気づきが交わる地点へ～

では、どうすれば、スミスと宣長の共感を実社会で生成できるであろうか。

スミスの共感論は、「与えあう」共感である。他者と関係をもつことで、共感が育まれることで、助け合いから、お互いに恩恵を与えあう。具体的には、精神的な喜びや満足感、実際に助け合う行為であった。そこで重要なのは、公平性である。一方的に与えることや、一方に与えるものがない場合、共感や関係は成立しない。これには、就労支援団体などの支援団体や趣味のサークルなどが有効に働く。まずは同じような考えを持つ人々の集まりから、徐々にその輪を段階的に発展できるようにする。

では、宣長のもののははれはどのようにして学ぶことが可能か。もののははれを知る為には、大きな挫折感を味わうことやわざを極めるなど、本論文で概観した方法は、日常的でない。そこで、筆者は、「私の過去」と「過去」、「私の将来」と「未来」に注目した。時間の捉え方である。協力隊元隊員の例では、途上国での生活から、「過去」と「未来」から自己が排されている。「過去」はその国の人を理解するための歴史や文化の積み重ねであり、「未来」は子供たちの大きくなった時の時間である。中山太鼓の例でも同様に「過去」は地域の人やものの歴史、「未来」は地域の未来、子供たちの未来である。しかし、就労支援団体にて数人に同じ質問をしたところ、「自分の過去と将来」と捉える人が多かった。これは、時間の感覚が自然＝存在になっていないためではないかと推察される。時間を広く捉える事が可能であれば、自然＝存在の感覚を体感することが可能ではないか。具体的には、おふくろの味を子供に教え、更にその子供に伝えることなどだ。このように、小さく身近な日常的な物の中にも、自然＝存在の可能性は多くある。

スミスの共感と宣長のもののははれを現代において体得するための筆者の考えをまとめた。しかし、詳細は現在の筆者では語ることはできず、今後の課題とするしかない。

終章 まとめ

以上、スミスの共感論、宣長のもののははれ論を軸に、共感研究を行った。その結果、共感の過程と結果としての助け合いの双方が相乗効果を起こしながら、生きやすさを導くことが明らかとなった。スミスの共感「自己」の発展と「生きている」実感を、宣長のもののははれは「世界」の中で「生かされている」という地盤を人々に与えることにより、生きやすさが個々人の心に芽生えたと考えられる。

以上

■ 註

- (1) 澤田瑞也『共感の心理学 そのメカニズムと発達』世界思想社（1992）pp.17-18
- (2) アダム・スミス、水田洋 訳『道徳感情論 上下巻』岩波文庫（2003）（原著“The Theory of Moral Sentiments” 1759-1790）
- (3) 伊藤整『近代日本人の発想の諸形式』岩波文庫（1981）pp.58-59
- (4) 本居宣長、子安宣邦校注『紫文要領』岩波文庫（2010）pp.96
- (5) 「老がこころ」『近世女子教育思想』第一巻、日本図書センター（1980）
- (6) 井上宗雄、中村幸弘編（項目）「もの」『福武古語辞典』福武書店（1988）
- (7) 大野晋『源氏物語のもののははれ』角川文庫（2001）pp.12
- (8) 井上宗雄、中村幸弘（項目）「あはれ」『福武古語辞典』福武書店（1988）
- (9) 中井和子「『もののははれに』について I」『京都府立大学学術報告』京都府立大学、26号（1974）pp.14
- (10) 坂東洋介「和歌・物語の倫理的意義について 本居宣長の「もののははれ」論を手がかりに」『倫理学年報』第59集、日本倫理学会（2010）pp.222-224
- (11) 生田久美子『わが言語 感覚の共有を通しての「学び」へ』慶応義塾大学出版株式会社（2011）pp.262-263

- (12) 岩田正美『社会的排除 参加の欠如・不確かな帰属』株式会社有斐閣（2008）pp.90-103
- (13) ロバート・N・ベラー、島藺進他訳『心の習慣 アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房（1991）pp.107
- (14) 仲島陽一『共感の思想史』創風社（2006）pp.20-21